

7月20日(日)、第1回中学校オープンスクール(午前・午後の2回)が行われました。連休の中日にもかかわらず、たくさんの小学生と保護者に来校していただきました。前半は、児童が体験授業に参加し、保護者は学校説明を聞いていただきました。後半は、体育館に児童と保護者が合流し、共に本校生徒によるプレゼン(学校生活の様子や中高一貫生によるニュージーランド短期留学の様子)を聞いていただきました。本校の様子、本校の魅力について知っていただけたと思います。

右の写真は、体育館プログラムが終了して行われた「先生と生徒と話そうコーナー」の様子です。中学生と校長・副校長・教頭が保護者・児童の質問に応じましたが、中学生の見事な回答に感心するばかりでした。日頃知ることができない生徒の対応力を発見したこともこの日の収穫でもありました。



ふり返りを丁寧に、習慣に

7月18日(金)の終業式で、3つのことについて生徒・先生方に伝えました。以下の通りです。

1つ目は、「ふり返り」を丁寧にしましょう、ということについてです。

今学期、先生たちは授業の質を高めていく一つの方法として、授業初めに「めあて」を提示し、授業終わりに「ふり返り」をすることに取り組んできました。しかし、さまざまな事情によりその通りではなかった授業もあったかと思いますが……。この「ふり返り」ということが実は重要なのです。

この1学期をふり返ってみましょう。学習に、部活に、健康管理に、友だち関係に……。良好だったのか、そうでなかったのか。上手くいったのであれば、それを習慣化すればいいし、そうでなければ、どうしたら肚落ちすることができるのかと考えなくてはなりません。次に向けてどうしたらいいのか。それが「ふり返り」なのです。事と次第によっては、一筋縄ではない、簡単なことではないこともあるかもしれません。しかし、諦めては何事も始まりません。「ふり返り」することによって、一歩先への踏み出しがスムーズになるに違いありません。「ふり返り」を丁寧に、習慣にしましょう。

2つ目は、新聞記事から考えてみたいことについてです。

『中国新聞』でジュニアライターという中高生が新聞記事を投稿していることを知っていますか？ 今月の14日(月)にこんな投稿、記事がありました。ゆっくり読みますので聞いてください。

教育には希望をつなぐ力

母国ルワンダに学校建設 マリールイズさん

1994年のルワンダ大虐殺を逃れ、NPO 法人「ルワンダの教育を考える会」(福島市)の理事長を務める永遠瑠(とわり) マリールイズさん(59)の講演が広島市中区の広島女学院中・高でありました。戦禍を

生き抜き、母国に学校を建てた経験を話しました。

洋裁の研修生として福島県で学び、帰国した2か月後に内戦が勃発。3人の子どもを連れ、約50キロ先の難民キャンプに歩いて避難しました。キャンプで子どもが赤痢にかかった際、日本人医師に病状を伝えると薬が処方されました。「日本語を学んでいたから命がつながった」と実感したそうです。

教育に救われた経験から2000年、首都キガリに学校を設立しました。「教育は未来を切り開いてくれる扉。子どもが安心して眠り、夢を持てる世界をつくりたい」と強調していました。

苦しくつらい経験を乗り越え、子どもたちに夢を与えている姿に強さと優しさを感じました。教育には希望をつなぐ力があると学びました。(中1河原理央菜)

この記事から思ったことは、改めて平和の尊さについて考えさせられたことは勿論のこと、教育の尊さや偉大さを痛感するとともに、教育に携わっている我々教師は、襟を正し、真剣に教育に関わっていかなくてはならないということ、使命であるという自覚を忘れてはならないということです。そして、生徒のみなさんの目線から考えると、その時その時の「学び」の機会をムダにしないで欲しいということです。

君たちには無限の可能性があり、ポテンシャルが潜んでいます。そのことにいつの段階で気づけるかは人それぞれでしょうが、「学び」を得て、自分が有しているものに早く気づき、それを磨いて欲しいのです。

3つ目は、夏休みの使い方についてです。

酷暑の夏となりました。なかなか思ったことができないかどうかわかりませんが、まとまった時間をつくれるチャンスでもあります。目的を持ち、計画的に、有効に時間を使いましょう。

そして、命の危険に晒されることがないように過ごしてください。2学期の始業式、笑顔に満ちたみんなに出会えることを楽しみにしています。